

平成22年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

児童生徒の「生きる力」を育てるために、キャリア教育を基盤として、伝統や文化の理解や国際理解を中心に地域の特色を生かした計画的・組織的・継続的な教育活動を展開することによる義務教育9年間を見通した教育課程、指導方法の研究開発

2 研究の概要

本校ではキャリア教育を研究の基盤に位置付け、義務教育9年間を見通した計画的・組織的な教育を展開するために3つの新設教科を設定し研究を進めることとした。

「将来設計科」では、自己情報や地域をはじめとする自己以外の進路情報を理解させ、体験的な活動によって深化させていく。また、世界文化遺産、歴史と伝統の町「宮島」という地域の特色を生かした「地域伝統科」により地域の伝統・文化への理解を深め、地域社会の一員としての自覚や伝統・文化の継承者となる人材を育てていく。さらに、国際的観光地という特色を生かす視点から「国際コミュニケーション科」を設置し、国際社会に生きる人間として国際的コミュニケーション能力を持った人材を育成していく。

これらの特色を生かした義務教育9年間の教育課程を編成・実施し、児童生徒が地域に誇りを持ち、自己と地域の進路を切り拓くための力を育むことへつなげていくために研究開発に取り組んだ。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

②児童生徒の「生きる力」を育てるために、①キャリア教育を基盤として、学校の教育活動全体を通じて継続的かつ組織的・系統的に地域の資源や教育力を有効に活用した実践的・体験的な教育活動を展開し、①伝統や文化、国際理解を中心とした地域の特色を生かし、①義務教育9年間の教育課程の編成・実施を行うことにより、②児童生徒が地域に誇りを持ち、自らの進路を切り拓くための力を育成することができるであろう。

①による手段を用いて②の成果を得たいと考える。

(2) 教育課程の特例（学習指導要領によらない部分）

① 新設教科の開設

- 自己と地域の未来を切り拓く人材の育成をめざし、キャリア教育を研究および教育活動の基盤に位置付け、義務教育9年間を見通した計画的・組織的な教育活動を展開するため、本校独自のキャリア教育学習プログラムの枠組に基づき、地域の特色や教育力を生かした「将来設計科」を設置した。
- 世界文化遺産、歴史と伝統の町「宮島」という地域の特色を生かし、地域の伝統・文化の理解を深め、地域社会の一員としての自覚や地域の伝統・文化の継承者となる意欲と実践力を備えた人材を育てたいと考え、「地域伝統科」を設置した。
- 国際的観光地「宮島」という特色を生かす視点から、国際社会に生きる人間として国際的コミュニケーション能力（またはグローバルコミュニケーション能力）を持った人材を育成したいと考え、「国際コミュニケーション科」を設置した。
- これらの特色を生かし、系統的な義務教育9年間の教育課程を編成・実施した。

② 新設教科を実施する学年

- 「将来設計科」「国際コミュニケーション科」「地域伝統科」を新設し、小1（1年）から中3（9年）まで系統的・発展的な教育課程を編成した。

③ 新設教科の授業時数（教育課程表は別紙）

平成21年度より学習指導要領(平成20年3月告示)の移行期間に入ることを受け、各教科、道徳、特別活動の時間数において原則として移行期間の時数を確保した上で、新設教科等の配當時数を調整することを基本に編成した。

- ・平成22年度、新設教科の授業時数は「総合的な学習の時間」から充てることを原則とし、小1(1年)は生活科等から54時間、小2(2年)は生活科等から56時間充て新設教科の授業時数を確保した。
- ・小3(3年)から小6(6年)については、総合的な学習の時間および外国語活動の時間相当分を新設教科として配分した。
- ・中1(7年)については、「総合的な学習の時間」から65時間、社会、音楽、美術から5時間ずつ充て、合計80時間。
- ・中2(8年)については、「総合的な学習の時間」から85時間。
- ・中3(9年)については「総合的な学習の時間」から125時間。
- ・新設各教科の学年間でのバランスをとるために総時数を35時間増やし年間1015時間とした。(中1(7年)～中3(9年))

この結果、各教科の学年の必要度に応じた時数の「傾斜配分」がなされ、より有効な教育課程として機能させていきたいと考えた。

【平成22年度 新設教科の年間授業時間】

新設教科・学年	小1(1年)	小2(2年)	小3(3年)	小4(4年)	小5(5年)	小6(6年)	中1(7年)	中2(8年)	中3(9年)
将来設計科	17	18	30	30	30	30	30	35	40
国際コミュニケーション科	34	35	35	35	45	45	45	35	70
地域伝統科	17	18	30	35	35	35	40	50	50
合計	68	71	95	100	110	110	115	120	160

(中1(7年)～中3(9年)は、総時数の35時間追加分が含まれる。)

④ 義務教育9年間を見通した教育課程の編成

ア 小1(1年)から中3(9年)までの義務教育9年間の連続性・系統性を踏まえた教育課程を編成し、義務教育の目標を達成することをねらった。

イ 小5(5年)から50分授業を実施した。

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

① 将来設計科の目標と内容

「将来設計科」は「自己をよく理解し、自らの役割や職業の意義を考え、勤労観、職業観を身に付け、将来の夢や希望を実現するための見通しを持たせることで、自らの力で将来を切り拓こうとする態度や資質を育てる」ことを目標としている。宮島(幼)・小・中12年間のキャリア教育学習プログラムの枠組の内容に基づきキャリア教育の4能力領域9能力を身に付けさせることを基本とし、小学校段階から進路指導を実践する。そのため、単元の作成にあたっては進路指導の6活動を取り入れた取組を実施する。

今年度は、各教科、道徳、特別活動におけるキャリア教育の発展的な内容を取り扱う教科として位置付けを明確にし、全学年において児童生徒が自己理解を進めるため、将来の夢や希望との関連において自分自身を正しく理解させる取組を実施した。

【将来設計科の指導方法の特徴】

小1(1年)～中3(9年)まで、自己の考える自分自身と、他者から見た自分自身を対比し、自己を正しく理解させる取組を実施している。また、地域の職業人をゲストティーチャーとして招いたり、修学旅行等の機会を活用し、地域以外の職業人と接する機会を設けたりするなど、職業人とのコミュニケーションを重視している。体験活動を中心に据えた単元構成によって、全学年で職場インタビューや職場体験学習を実施し、その準備や事後の振り返りを通して、自らの将来を切り拓くために必要な情報を得させ、その意欲と実践力を高めさせていくことが特徴である。

また、さまざまな学習を経て最終的に自己や自己の地域に帰結して物事を考えること、さらに、自己の個人的な将来像だけでなく、国際コミュニケーション科や地域伝統科でも自己の地域と他地域の(進路)情報を得る活動の中で自分を取りまく地域の将来像についても考えることを重視して進めている。このように3教科間において互いの学習内容が関連づけられ相互に発展的に展開していくことを図りながら実践している。

これらを学習による効力感を測るアンケートの推移や、将来の夢や希望とそれに対し

て今自分がすべきことなどを記した掲示物の内容の変遷などから児童生徒の内面的な進路に対する意識および勤労観、職業観の定着の様子を評価してきた。

② 国際コミュニケーション科の目標と内容

「国際コミュニケーション科」は、「英語によるコミュニケーション学習を通して、外国の文化を理解し、日本や宮島の文化のよさを認識し、そのよさを英語で発信したり受信したりできる国際コミュニケーション能力を養う」ことを目標にし、社会の急速なグローバル化に対応できる国際コミュニケーション能力の育成と国際的地域人としての自覚を育成することをねらいとした教科である。

また、「地域の進路指導」を実践する教科として、「進路指導の6活動」の内容をアレンジした「国際コミュニケーション科の6活動」を学習の活動に取り入れている。

【国際コミュニケーション科の指導方法の特徴】

前期〔小1（1年）～小4（4年）〕においては、まず、英語に親しませることが大切であるので、歌やジェスチャーなどによって、英語の音の独特なリズムに慣れ親しませながら、non-verbalな表現方法も併せて指導していく。また、家や学校など身の回りの英語を学習させるとともに、地域の特徴的な単語や表現も学習させ、中期、後期における発信の素地となるように、簡単な英語で地域の特徴を表現する活動も取り入れる。

中期〔小5（5年）～中1（7年）〕においては、学習した英語の単語や英文を使って、地域のことや自分のことを表現することができるように、適宜調べ学習も取り入れる。また、地域伝統科で学習した内容も参考にするなど、他教科との連携を図る。さらに、後期におけるガイド活動につながるように、スピーチ等によって、自分の思いを表現できるような活動を盛り込んでいる。

後期〔中2（8年）～中3（9年）〕の中2（8年）では、職場体験での英語によるおもてなしや、修学旅行でのガイド活動など、将来設計科等との連携により生徒に目的意識をもたせる。また、中3（9年）での「宮島英語ボランティアガイド」に向けて、2学年合同でガイドを行い、先輩が後輩に教える活動を取り入れ、地域を発信する活動と地域に対する思いを引き継ぐことができるようにする。

三年次は児童生徒の意識面（関心・意欲・態度）での変容を中心とした評価からコミュニケーション能力そのものの量的測定が可能な「パフォーマンステスト」を取り入れることにより、多角的に子どもたちの学びを評価することとした。

③ 地域伝統科の目標と内容

「地域伝統科」は「地域の伝統や文化の価値を理解し、他地域の文化を尊重するとともに、地域を自らの誇りとして、地域の発展に貢献し国際社会でたくましく生きる資質を育てる」ことを目標としている。

また、「地域の進路指導」を実践する教科として、「進路指導の6活動」の内容をアレンジした「地域伝統科の6活動」を学習の活動に取り入れている。

今年度は各教科・道徳・特別活動における「わが国の伝統や文化に関する教育」の発展的な学習としての位置付けを明確にした。そのため、自己の地域の伝統や文化について学習すると同時に、他地域の伝統や文化について学習することによって、地域の特色を理解できるよう工夫した。また、それらの歴史的背景や地域の人々が伝統や文化を守り継承するためにどのような努力をしたのか、地域の方をゲストティーチャーとして招き、外部講師の講話を聴くことで、児童生徒が地域の伝統や文化に誇りを持ち、地域の発展に貢献しようとする意欲を持たせようとした。

【地域伝統科の指導方法の特徴】

小1（1年）～中3（9年）まで、地域の伝統や文化のよさを考え、それを体験することによって地域社会に参画する意欲を育てることをねらいとした指導を実践している。地域のよさを理解する取組として、地域の伝統や文化と他の地域の伝統や文化を対比させ、地域の伝統や文化を再確認・再評価させることに力を入れている。

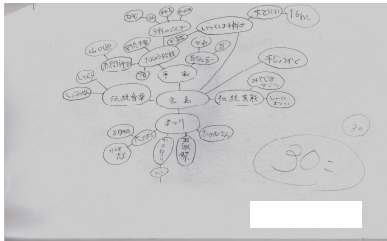
宮島は世界文化遺産であり、国立公園であり、古くから日本三景の一つとして名が知られた場所である。しかし、そこで生活をしている児童生徒は「宮島はよいところ」という観念的なイメージは持っているものの、良いところを具体的に語ることには不十分という実態であった。

自己や自己の地域の良さを具体的に実感するために自己や自己の地域に足りないものや課題を解決するヒントを他者や他地域から得たり、逆に自分や自己の地域での事例を発信したりすることにより自己や地域への理解が一層深まりさらなる課題を設定し探究的な活動につなげていこうとしている。地域伝統科においては、この対比の場面が他の

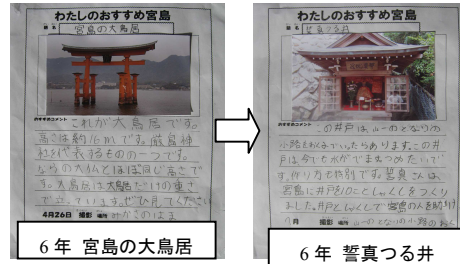
教科に比べ多くなるが、将来設計科や国際コミュニケーション科においても理解を深めさせるための手だてとして有効である

また、地域社会参画への意欲を高める取組として、地域行事の由来やそれに対する思いを地域の人材や専門家から学び、実際に体験させることを指導の中心に置いていることも特徴である。

地域伝統科では、単元終了後等に児童の知識・理解面（情報量）での伸びを測定するため「マッピング」の手法や、たてわり班活動による「おすすめスポット」のシートへの記入内容の変容を分析することを取り入れた評価計画を立て、質的な観点を評価の視点に加えることにより意識面での変容と合わせて児童生徒を総合的に評価しようとした。



児童生徒によるマップ



おすすめスポット紹介シート（1回目・2回目）

(2) 研究の経過

<p>第一年次 (将来設計科に重点を置き実践事例集等の作成等を通して情報提供を図る)</p>	<p>理論研究とともに、仮説に基づく実践を開始し、実践の中から研究の方向性を定める。(義務教育9年間を見通した取組, 新しい学習指導要領に基づく教育課程の編成と実施)</p> <ul style="list-style-type: none"> 先進校視察やこれまでの研究開発学校の研究成果を参考に、研修計画を作成する。 研究の方向性確立のための理論研究や実態調査を行う。 新しい学習指導要領についての研修を行う。 キャリア教育, 伝統や文化に関する教育の視察, 英語活動・国際理解教育に関する先進校の視察や研究成果を検討する。 新設した「地域伝統科」「国際理解科」「将来設計科」について発達段階に応じた教育課程を作成する。 中学校全教諭と小学校一部教諭の小中兼職発令による授業実践を行う。 小中の学習指導や生徒指導等における小中教師間の相互理解と, 指導の改善のための相互乗り入れ授業の実施と合同授業研究を実施する。 義務教育9年間を見通した各教科のカリキュラム及び系統表を作成する。 各教科等の内容と国際理解, 伝統や文化, キャリア教育の関連を整理する。 小3(3年)から小6(6年)における一部教科で教科担任制を実施する。 中3(9年)の上級学校体験を実施する。 幼稚園, 高等学校との連携を強化する。 幼・小・中12年間の「キャリア教育学習プログラム」を修正する。 講師招聘による小中合同研修(幼稚園も含む)を実施する。
<p>第二年次 (地域伝統科に重点を置き実践事例集等の作成やESD・世界遺産教育の充実につなげる)</p>	<p>第一年次の実践を見直し, ねらいに沿った教育課程や指導方法を実践研究する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 第一年次に作成した「地域伝統科」「国際コミュニケーション科」「将来設計科」の教育課程の授業実践と修正カリキュラムを作成する。(各教科, 道徳, 特別活動等との関連) 義務教育9年間を見通した各教科系統表およびカリキュラムを修正する。 小3(3年)から小6(6年)の一部教科における教科担任制を実施する。(小5・6(5・6年)を中心とした教科担任制およびMTによる指導を重点に) 小学校教諭による中学校生徒への授業実践を行う。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中3（9年）の上級学校体験を実施する。 ・ 幼稚園，高等学校との連携を強化する。 ・ 幼・小・中12年間の「キャリア教育学習プログラム」を実践・修正し各月ごとのキャリア教育プログラムを作成する。 ・ 講師招聘による小中合同研修を実施する。
<p>第三年次 （国際コミュニケーション科に重点を置き，地域に誇りを持ち積極的にコミュニケーション活動を通して発信していこうとする態度を育成する）</p>	<p>第二年次終了時に作成したカリキュラム（①新教科学習指導要領（2年次案）②新教科単元系統表 ③新教科評価規準 ④新学習指導要領と新教科の関連事項（表） ⑤新学習指導要領解説と新教科の関連事項（表） ⑥新教科単元の評価規準（年間指導計画—シラバス） ⑦地域伝統科実践事例集（単元計画，使用資料） ⑧キャリア教育学習プログラム ⑨キャリア教育学年別月別学習プログラム）を本格実施し，その有効性の検証と実践上の必要から生じた改善点を踏まえ，カリキュラムを完成させる1年とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 第一年次，第二年次の成果をもとにした「将来設計科」「国際コミュニケーション科」「地域伝統科」の教育課程の継続実践と改善・検証を行う。 ・ 講師を招いての理論研修や，学習内容に応じた児童生徒への体験活動を実施することにより，新設教科の実践理論の確立と学習の深まりを図る。 ・ 3年間の研究のまとめを行う。 ・ 公開研究発表会を開催し，3年間の研究報告書（研究紀要および地域伝統科副読本の完成・製本）を作成する。

（3）評価に関する取組

<p>第一年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究に関する全体計画，各部の研究計画について運営指導委員の評価および指導を受ける。 ・ アンケート調査を行い，実施の効果や改善点を検討する。（実践を行った教科に関する意識調査，小1（1年）～中3（9年）の児童生徒の義務教育9年間を見通した学習や生活の様子に関する意識調査，新設教科に関する地域・保護者の感想や意見，教職員の意識調査） ・ 全国学力・学習状況調査及び広島県教育委員会実施の「基礎・基本」定着状況調査などの諸調査による評価を行う。 ・ 運営指導委員会による評価を実施する。
<p>第二年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第一年次の反省をもとに改善した第二年次の研究に関する全体計画，各部の研究計画について運営指導委員の評価および指導を受ける。 ・ アンケート調査を行い，前年度の児童生徒との比較を行う。（実践を行った教科に対する意識調査，小6（6年）と中1（7年）の中学校入学に対する意識調査，小3（3年）～中3（9年）の児童生徒の学習や生活の様子，研究全般に関する地域・保護者の感想や意見，教職員の意識調査） ・ 全国学力・学習状況調査などにおいて前年度との比較を行い，課題を整理する。 ・ 運営指導委員会による評価を実施する。 ・ 教科の評価規準表の妥当性を検証する。
<p>第三年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第二年次の反省をもとに改善した第三年次の研究に関する全体計画，各部の研究計画について運営指導委員の評価および指導を受ける。 ・ アンケート調査を行い，その結果により3年間の同学年の比較，それぞれの学年の3年間の変容を調査し，その効果と課題を検討する。（実践を行った教科に対する意識調査，小5（5年）～中3（9年）の児童生徒の学習や生活の様子，研究全般に関する地域・保護者の感想や意見，教職員の意識調査） ・ 研究内容の有用性を児童生徒の学習意欲や理解の深まりおよび結果としての行動などの変容を作成物や文章表現などをもとに見取る。（将来設計科—掲示物の記入内容の変化（各学期更新，全児童生徒対象），国際コミュニケーション科—パフォーマンステスト（学期1回全児童生徒対象），地域伝統科—マッピング（学期1回全児童生徒対象），たてわり班活動による「おすすめスポット」の取組）またその全体的な数値的推移や傾向も見取ることによって研究全体を総括・評価する。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全国学力・学習状況調査，広島県「基礎・基本」定着状況調査などにおける前年度との比較を行い，課題を整理することを通して義務教育9年間を見通した教育課程を評価する。 ・ 運営指導委員会による評価を実施する。 ・ 教科の評価規準表の妥当性を検証する。
--	--

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

① 児童生徒への効果

ア 将来設計科

(図1)は小5(5年)～中3(9年)の「自己の将来に対する関心・意欲・態度」に関するアンケート結果である。平成22年5月の肯定的回答は80.6%，10月には90.0%で9.4%上昇している。これはどうすればその夢が実現するかを調べたり上級学校について調べたりする学習や修学旅行などの体験学習によるものと考えられる。

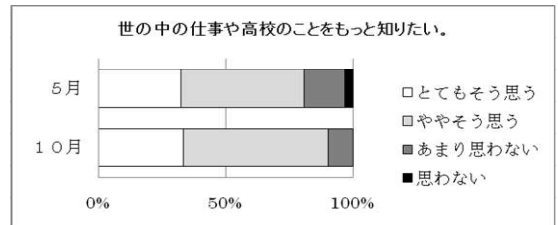
(図2)は小5(5年)～中3(9年)の「自己と進路情報についての知識・理解」に関するアンケート結果である。平成22年5月の肯定的な回答は45.2%，10月には58.3%で13.1%上昇している。これは中2(8年)の上級学校についての学習や中3(9年)の上級学校訪問やオープンスクールへの参加などによるものと考えられる。

(図3)は、小5(5年)～中3(9年)の「自己の夢や希望に関する理解」に関する3年間のアンケート結果である。肯定的な回答は平成20年度は74%，平成21年度は84.3%，平成22年度10月は85%とわずかずつではあるが上昇している。自分の将来の夢や就きたい職業を教室掲示したり，随時更新したりすることで，児童生徒が自分の将来について意識する機会が増えたことも関連があると考えられる。

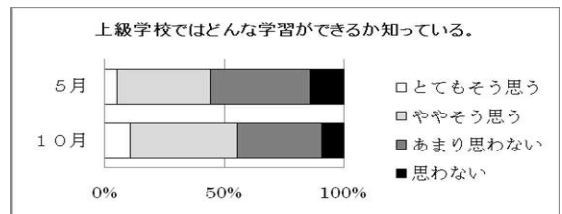
(図4)は将来の夢やつきたい職業について各教室に統一して掲示している掲示物である。これは、「つきたい職業(夢)」「その理由」「そのために今がんばっていること」が記され，学期に1回程度更新している。自分の夢やその理由などの変遷を学習の足跡として掲示し，互いに日常的に目にすることで自他の理解にも役立てている。

この児童は，当初は漫画家という職業を選択していたが，次の更新時には警察官へと変化している。この間の将来設計科の授業において，「宮島の仕事」という単元において身近に見られる仕事の多様性に気付き，それぞれの職種の特性を学習していく中で，社会に貢献できる職種に興味を示していった。さらに，儀式等で折にふれて警察官に講話をいただいたことや身内にいたことなども作用して現時点での選択となっている。

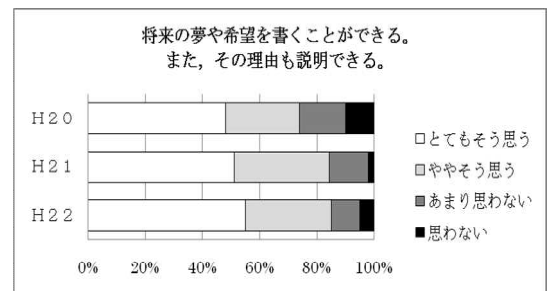
このような変化は他の児童生徒にも多く見られており，将来設計科の指導と児童生徒の変容との因果関係が認められ，児童生徒の具体的な姿の変化から内容と指導方法の有効性が確認されたものと考えられる。



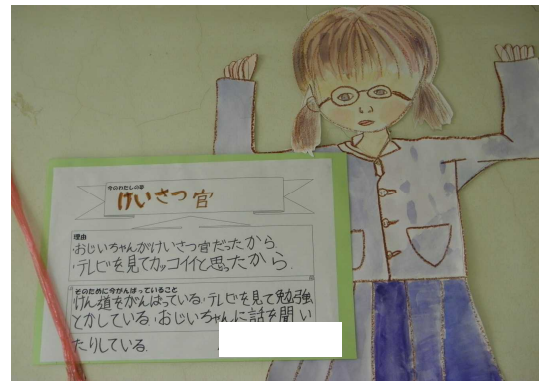
(図1) 自己の将来に対する関心・意欲・態度



(図2) 自己と進路情報についての知識・理解



(図3) 自己の夢や希望に関する理解

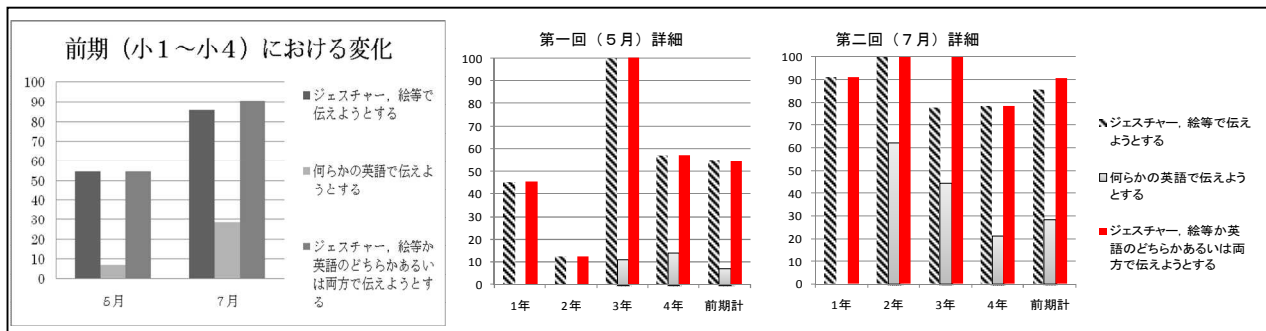


(図4) 自己の夢や希望に関する掲示物(5年生)

イ 国際コミュニケーション科

今年度ここまでに行った2回のパフォーマンステストにより児童生徒のコミュニケーション能力の伸長を図ることをもって国際コミュニケーション科の児童生徒への効果を検証する。

○ 前期 (小1 (1年) ~小4 (4年))

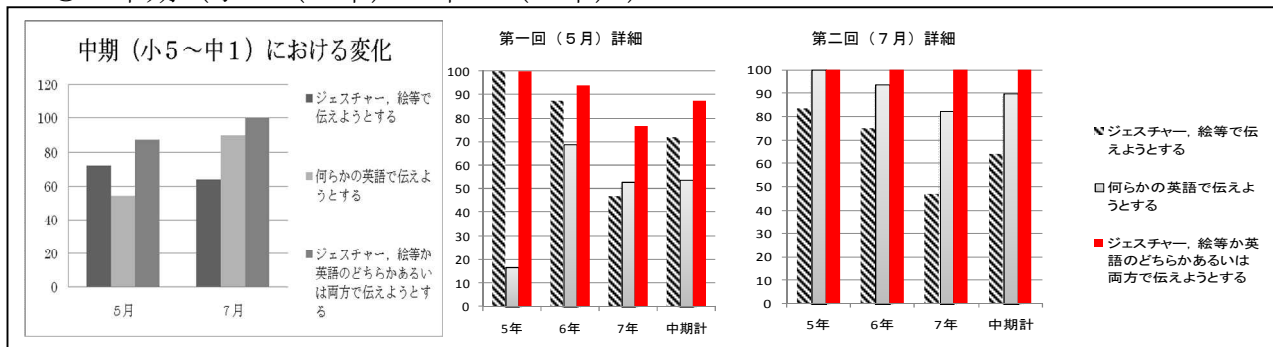


(図5) 第一回、第二回パフォーマンステスト - 小1~小4及び前期計 -

(図5)は第一回、第二回パフォーマンステスト - 小1~小4および前期計 - である。

前期全体で、ジェスチャー、絵等か英語のどちらかあるいは両方で伝えようとする児童の割合は第一回で約5割だったが、第二回では約9割に増えた。特に、第一回ではあいさつ以外はほとんど何もできなかった2年生の伸びが目覚ましい。この原因としては、6月に行った英語でのお店屋さんごっこで、主体的・積極的に英語を使うようになる児童が増えたことが考えられる。ALTに場所を教える際、学習した英語のうち、Walk, Goなどの動詞を使う児童もいた。また、前期全体で、ジェスチャーなどのnon-verbalな方法に加えて、英語を使って説明しようとする児童が第一回では1割に満たなかったが、第二回では約3割になった。

○ 中期 (小5 (5年) ~中1 (7年))

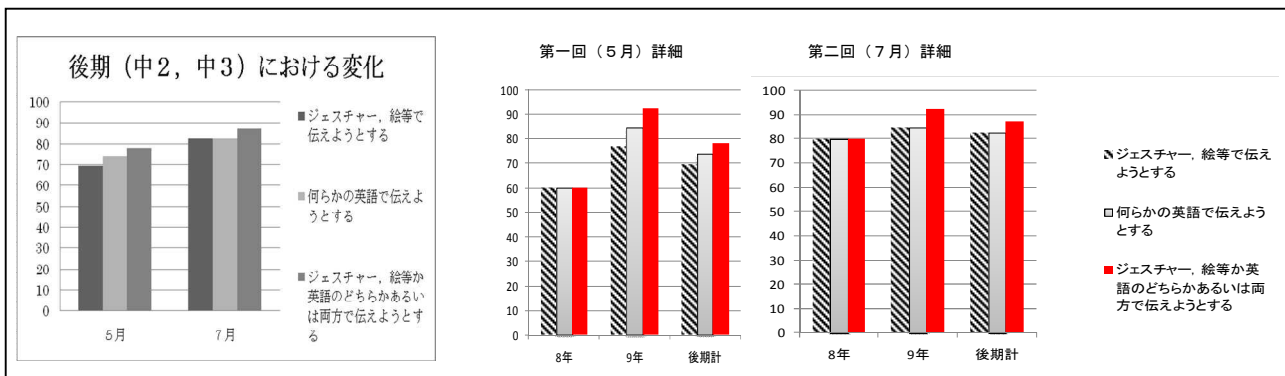


(図6) 第一回、第二回パフォーマンステスト - 小5~中1及び中期計 -

(図6)は第一回、第二回パフォーマンステスト - 小5~中1および中期計 - である。

中期全体では、全員がジェスチャー、絵等か英語のどちらかあるいは両方で伝えようとした。また、何らかの英語を使う生徒が前回半分程度だったのが、9割になった。特に、5年生全員が「何らかの英語で伝えよう」としており、6月に行った宮島の名所・名物の名前やそれを表す形容詞の学習が有効であったと考えられる。

○ 後期 (中2 (8年) ~中3 (9年))



(図7) 第一回、第二回パフォーマンステスト - 中2~中3及び後期計 -

(図7)は第一回,第二回パフォーマンステスト一中2~中3および後期計一である。後期全体では,ジェスチャー,絵等か英語のどちらかあるいは両方で伝えようとした生徒が9割近くに増え,特に8年生は,前回6割だったのが,8割にのびている。9年生については,英語ボランティアガイドで大鳥居を担当する生徒以外にも,大鳥居について何らかの英語で説明することができた。

このように各ブロックごとに実態―指導―変容が実際のデータにより裏付けられたことにより,国際コミュニケーション科の内容および指導方法と児童生徒への効果の因果関係が認められた。したがって一定の効果が上がったと言える。

ウ 地域伝統科

【「おすすめスポット」の取組から】

4月のおすすめスポット学習においては,厳島神社,大鳥居,千疊閣,五重塔,多宝塔など宮島を代表する建物を103人中77人が取り上げていた。

7月のおすすめスポット学習においては,宮島を代表する建物を22人が取り上げ,それ以外の風景や建物などを100人中78人が取り上げていた。

① 児童生徒の「おすすめスポット」の記述

1年生 Y君 4月 これはじんじゃです。うみにうかんでいるめずらしいじんじゃです。ぜひみにきてください。 7月 これはおもちをつくうすです。いろんなおうちのまえにあります。むかしはぎょうじのたびにおもちをつくっていたそうです。ぜひみにきてください。
--

4年生 U君 4月 これが五重塔です。じしんにたおれないようくふうがしてあります。 7月 せんりゅう門は天に行かない龍がこのせんりゅう門をくぐっているからせんりゅう門といわれるようになりました。せんりゅう門のそばが昔は海でした。
--

8年生 O君 4月 宮島にある大鳥居と昔からいる鹿が一緒に移っている写真です。大鳥居は宮島のシンボルだし,世界的にすごく有名です。そんな二つと一緒に撮れました。 7月 ここは昔,魚が一番最初におろされている所だったので魚屋がたくさんあり,栄えていました。今は魚屋がないけど昔の町,道が残っています。写真の手前まで昔は海だったそうです。

このように,対象に対する説明や描写のしかたが一段と詳細になり,視点も表層的な部分から深まりのあるものとなっている。これによりゲストティーチャーとともに行うフィールドワーク(体験活動)を中心とした学習内容により地域への理解が深まり,地域伝統科のねらいにせまることができた。

② 教師への効果

(図8)は,小・中の教員を対象に実施したアンケートの結果である。「義務教育9年間を見通した指導」「わかる授業づくり」「『将来設計科』『国際コミュニケーション科』『地域伝統科』のカリキュラムづくりの進捗状況および効力感」に関する満足度(取組に対する肯定的評価)の3年間の推移を集計したものである。年度ごとの増減はあるものの三年次を終えてどの項目についても7割前後の満足度を示しており,研究開発および義務教育9年間を通じた教育課程での指導を行う主体としての教師における効力感を伴った意識であり,一定の効果が上がっている。これは,児童生徒の変容と表裏一体をなすものであり,ここに至った要因については「児童生徒への効果」を参照されたい。児童生徒の向上した姿によって指導側の意欲も高まり,さらに次の活動で深めさせていくことが可能になるという児童生徒と指導者間における関係性が成立しているからである。

③ 保護者等への効果

(図9)は、保護者を対象に実施したアンケートの結果である。「義務教育9年間を見通した指導」「わかる授業づくり」「『将来設計科』『国際コミュニケーション科』『地域伝統科』の指導」に対する肯定的評価の3年間の推移を集計したものである。

特徴的なのは、いずれの項目も1年目が突出して高評価であり、漸次肯定的評価が減少していることである。

これには次のような原因が考えられる。

まず、1年次の集計は新教科発表会という行事直後であり、保護者や地域の印象に強く残り大きな期待感もあったものと思われる。

次に1年次と2年次の比較において減少傾向が見られるのは、本校の進める研究の意義と子どもたちの姿に見られる成果は評価しつつも、行事や体験的活動の準備などで通常の教育課程による教科等の指導が損なわれている保護者側の懸念が反映しているものと思われる。

しかし、その後の基礎・基本定着の取組などにより保護者の理解はある程度浸透し、その延長線上としての新設教科への評価も「回復」が見られる。

実践内容や成果の発信だけでなく、計画的なスケジュール管理のもとで児童生徒がのびのびと活動する姿をもっと強調して保護者や地域への理解を求めていくことが必要である。

また、アンケートでは以下のような具体的記述による意見が寄せられた。実施上の課題はあるが、概ね肯定的に受け止められ、児童生徒への家庭や地域からの支持・支援も得られたものと考えられる。

【将来設計科】

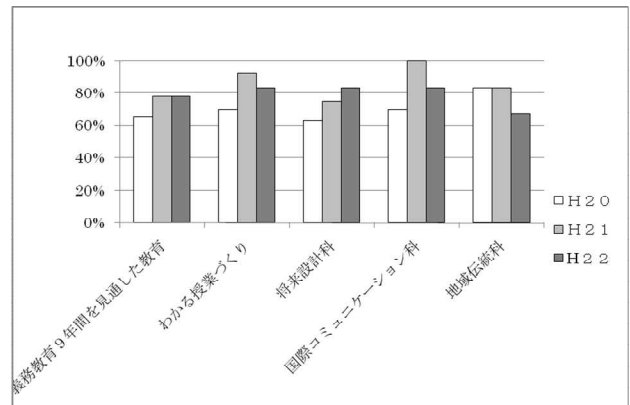
- まだ将来の仕事を決めるまではいかない年齢だとは思いますが、今何かやりたいと目標を持つことが大切だと思う。(小3(3年)保護者—以下同じ)
- 3年間の将来設計科でいろいろなことを学び、とても興味をもって勉強していることが子どもの様子を見てわかる。(中3(9年))
- 世のため、人のため役に立つという考えを持ってほしい。(小3(3年))

【国際コミュニケーション科】

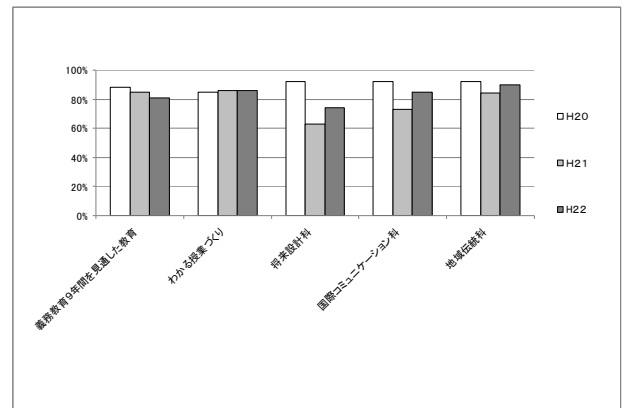
- ボランティアガイドのおかげで、お客様が来られたときに説明できるので感心させられる。(小4(4年))
- 宮島を訪れている外国人に話しかけてみよう、あいさつしてみようという気持ちになっているようなので、それは国際コミュニケーション科のおかげだと思う。(小6(6年))
- 外国人観光客に対して、まだ授業のひとつとしてやらされているという感じがあり、能力はまだまだと思う。(中2(8年))

【地域伝統科】

- 一時期地域の伝統文化のことをほとんどやらなかったため、全く興味がなく何も知らない年代の人がいる。今とても危機感があり、このたび子供たちが学んでくれたことで少しでも大人になったときに覚えていて、また参加してくれたらと思う。少人数でも覚えていたら継承は可能です。(小4(4年))
- まだ難しすぎる所があると思う。自然と体にしみ込んでくることを願います。(中1(7年))



(図8) 教師による肯定的評価



(図9) 保護者による肯定的評価

(2) 実施上の問題点と今後の課題

① 実施上の問題点

- ア 本校で設置した新設教科は、学習指導要領(平成20年3月告示—以下学習指導要領)および解説(同8月、9月告示—以下解説書)の趣旨を完全にふまえたものでなければ

ならない。そこで、研究と並行して、あるいはその土台作りとして学習指導要領および解説書を全職員で読み込み、将来設計科（キャリア教育）、国際コミュニケーション科（国際理解教育）、地域伝統科（我が国の伝統や文化を尊重する教育）の3つの領域に関する部分を抜き出し、一覧表化し資料として作成することにより関連性を明確にした。これらを十分に活用し、来年度以降のカリキュラム作成に反映させていかなければならない。

イ さらに、研究開発学校の使命は次期の学習指導要領の改訂を見据えた研究内容を創造することである。新たな領域の学習活動を提案するには、児童生徒の具体的変容という事実をもってデータ提供をしなければならない。本校では児童生徒の関心・意欲・態度面での変容は一定量のデータに基づき効果を検証することはできたが、量的測定が必ずしもあてはまりにくい心情面（「情意」）での変化や深まりを十分なデータをもとに報告することについては不十分であった。

② 今後の課題と方向性

ア 平成23年度教育課程の編成について

研究開発期間の終了にあたって、新設教科に関する取組の結果を通常の課程に復元する作業が今後必要となってくる。

将来設計科のカリキュラムは参考資料として特別活動を中心とした各教科等の自己の将来に関わる学習の実践例として活用していく。国際コミュニケーション科および地域伝統科（仮称）については総合の一部として教育課程上は存続させ、課題学習につなげていく一連の学習活動を本校としては総合的な学習の時間と位置付けたい。

このように成果と課題および今後の見通しを踏まえた教育課程編成のために1年間の指定期間延長を申請した。

イ 作成資料について

本校の新設教科は「総合的な学習の時間」の理念や、目標をより効果的に具現化する一つの方策として「教科化」し、カリキュラムの編成作業をしているという側面を併せ持っている。本校で進める新設教科の教育課程はその成果を研究開発期間終了後、平成23年度および24年度より、通常教育課程における「総合的な学習の時間」等に取り入れて実施していく予定である。

そこで、各新設教科の年間指導計画の中での単元指導計画をユニットとしてパッケージ化し、それを単位にその時の教育課程の配当時数に応じて取捨選択できるように提案していく。

ここまで3年間の研究および実践の成果として以下のものが作成済みであり、本校研究開発のハード面での成果として提供したい。

- ① 新教科学習指導要領（第三年次案）
- ② 新教科単元系統表
- ③ 新教科評価規準
- ④ 学習指導要領（平成20年3月告示）と新教科の関連事項（表）
- ⑤ 学習指導要領（平成20年3月告示）解説と新教科の関連事項（表）
- ⑥ 新教科単元の評価規準（年間指導計画—シラバス）
- ⑦ キャリア教育学習プログラムの枠組
- ⑧ キャリア教育学年別月別学習プログラム
- ⑨ 単元ユニット集（新教科実践事例およびワークシート集）

本校では、来年度教育課程編成にあたり、学年ごとに各教科等の学習内容や行事などとの関連、および学年間の系統性などに鑑みながら内容を精選し、総合的な学習の時間を70時間程度に縮小する方向で立案していく。

ウ すべての教育活動の基盤と位置付けるキャリア教育について

教育課程の基盤となっているキャリア教育を、新設教科を貫く取組としてさらに充実させる必要がある。キャリア発達の諸能力を育成するための具体的な取組を明確にし、児童生徒の変容を見取り、研究開発の成果と課題をまとめていきたい。その際、地域に貢献する取組に重点を置き、本校独自の能力である地域社会参画能力の育成について検証し、幼・小・中12年間のキャリア教育学習プログラムの枠組みの中で鮮明にさせていかなければならない。

さらに、平成22年5月17日付中央教育審議会・キャリア教育・職業教育特別部会より「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について—第二次審議経過報告のポイント—」が出され、キャリア教育推進にあたっての新たな視点やポイントが提起されている。

本校のこれまでのキャリア教育の実践の積み上げに加えて学校内外でのキャリア教育に関する諸課題に向き合っていかなければならない。その際、本校の新設教科の学習内容を有効に機能させることができれば、本校の目指す児童生徒像に近づけていくことができるものと考えられる。

宮島小学校 教育課程表（平成22年度）

（ ）内は移行期間標準時数との差

	各教科の授業時数									道徳	特別活動	総合的な学習の時間	外国語活動	新設教科			総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育					将来設計科	国際コミュニケーション科	地域伝統科	
第1学年	272		136		64 (-38)	60 (-8)	60 (-8)		102	34	34			17 (17)	34 (34)	17 (17)	830 (14)
第2学年	280		175		69 (-36)	60 (-10)	60 (-10)		105	35	35			18 (18)	35 (35)	18 (18)	890 (15)
第3学年	235	70	175	90		60	60		90	35	35	0 (-95)		30 (30)	35 (35)	30 (30)	945
第4学年	235	85	175	105		60	60		90	35	35	0 (-10)		30 (30)	35 (35)	35 (35)	980
第5学年	180	90	175	105		50	50	60	90	35	35	0 (-75)	0 (-35)	30 (30)	45 (45)	35 (35)	980
第6学年	175	100	175	105		50	50	55	90	35	35	0 (-75)	0 (-35)	30 (30)	45 (45)	35 (35)	980
計	1377	345	1011	405	133 (-74)	340 (-18)	340 (-18)	115	567	209	209	0 (-35)	0 (-7)	155 (15)	229 (29)	170 (17)	5605 (29)

宮島中学校 教育課程表（平成22年度）

（ ）内は移行期間標準時数との差

	各教科の授業時数									道徳	特別活動	選択教科	総合的な学習の時間	新設教科			総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	外国語					将来設計科	国際コミュニケーション科	地域伝統科	
第1学年	140	100 (-5)	140	105	40 (-5)	40 (-5)	90	70	105	35	35	0	0 (-65)	30 (30)	45 (45)	40 (40)	1015 (35)
第2学年	105	105	105	140	35	35	90	70	105	35	35	35	0 (-85)	35 (35)	35 (35)	50 (50)	1015 (35)
第3学年	105	85	140	105	35	35	90	35	105	35	35	50	0 (-125)	40 (40)	70 (70)	50 (50)	1015 (35)
計	350	290 (-5)	385	350	110 (-5)	110 (-5)	270	175	315	105	105	85	0 (-25)	105 (105)	150 (150)	140 (140)	3045 (105)